実践報告

協働的な創造活動による授業づくり：中学校・大学・特別支援学校卒業生のARTクラブとの連携を通じて

三浦　真由子　髙橋　智子

袋井市立袋井南中学校　静岡大学学術院教育学領域美術教育系列

Creating Lessons through Collaborative Creative Activities: Collaboration between Junior High Schools, Universities, and ART Clubs

Miura Mayuko Takahashi Tomoko

要旨

本論は、2022年に実施した袋井市立袋井南中学校の中学生と教員、静岡大学教育学部美術教育専修の学生有志教員、特別支援学校の卒業生のアートクラブ「atelierQUOKKA」の協働による授業実践の報告である。協働的な学びが求められる昨今、中学生と大学生と障害のある人という三者による協働の方法を模索し、２つの題材を開発した。さらに、中学生が授業で制作した作品は「atelierQUOKKA」と大学生の作品とともに大学生の手によって展示され、作品を通して三者がつながる活動を実施した。協働的な学びに注目した本実践の内容を報告すると共に、成果と課題について考察し、さまざまな他者と連携して行う協働的な学びによる授業づくりについて考える。

キーワード：　美術科　協働的な学び　連携　題材開発　作品展示

１．はじめに

文部科学省答申（令和３年）では、予測困難で複雑に変化する社会を前向きに受け止め、生き抜くための資質・能力を児童生徒に身につけさせるために、学校教育では個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を目指す方向性が提言された[1]。その中で、協働的な学びは「多様な他者と協働しながら、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、様々な社会的な変化を乗り越え、持続可能な社会の創り手となることができる」[2]資質・能力を育成するものと記載されている。

情報化やグローバル化が進む現代社会において、格差の拡大や機会の不平等、エネルギーや環境の問題など、世界的な課題が顕現している。こうした諸課題に対して、地球規模で解決に取り組もうと定められたのがSDGs(持続可能な開発目標)である。SDGsは誰一人取り残さない、多様性や包摂性の実現を謳っており[3]、国際的な協働が不可欠であるとしている。それぞれの立場や背景に関わらず、互いの存在価値を認め合いながら同じ目標に向かう建設的な関係を築くことや、皆が豊かで幸福な生活を送ることが求められている。多様な他者と認め合い、同じ目的に向かって協力する力を育むことは、未来を生きる個人にとっても、社会全体にとっても重要である。

２．美術科における協働的な学びの課題

中学校美術科の学習においても、美術科特有の資質・能力と同時に、個別最適な学びと協働的な学びの一体化が求められている。表現したいという思いを持って主題を発想し、個々の思いに合わせて方法を工夫しながら表現する活動に取り組む美術科の授業では、これまでも個別最適な学びを実現してきたといえる。一方で、協働的な学びをどのように取り入れるかは、各教員に委ねられている部分が大きい。生徒が発想を広げる場面や作品鑑賞の場面において、グループ活動を通して、自他の見方や感じ方を広げたり深めたりする協働的な学びは、どの分野の題材でも比較的取り入れやすく、効果的な実施方法やタイミングが検討されている実践例も多く見られる。図画工作科や美術科において、協働性が重視されてきている現在、さらに多様な他者と協働して新たなものやことを生み出す教育が求められるといえる。

中学校美術科の教科書は３社から出版されているが、そのうち学校外の他者との協働的な学びの題材が紹介されているのは、A社で全54題材のうち２題材、B社で全56題材のうち１題材、C社で全39題材のうち４題材であった[4]。学校外の他者との協働の重要性は認識されつつも、教科書での題材としての取り扱いについては数が少ない状況であり、その意義や方法が幅広く理解されているとは言い難い状況が窺える。

また、中学校美術科の学習指導要領では、指導計画の作成と内容の取扱いの中で「共同で行う創造活動」について言及している[5]。「共同」や「協同」は複数の者が力を合わせて物事を行うことという意味

を持つ。一方「協働」は、同じ目的に向かい、複数の者が対等な立場で協力し、働くことを意味している[6]。今後、美術科の学習の中で、学びを「共同」の視点からだけではなく、「協働」の視点からも捉えていく必要があると考える。

本稿は、こうした課題意識の下で、静岡大学教育学部美術専修の学生有志[7]、静岡大学教育学部美術教育系列の教員、静岡県立富士特別支援学校富士宮分校の卒業生の ART クラブ「atelierQUOKKA（アトリエクオッカ）」（以下、「atelierQUOKKA」と記す）との協働により実施した作品制作及び作品展の実践について、中学校の題材開発の視点からその成果と課題をまとめたものである[8]。

３．研究目的

前項では、協働的な学びの機会創出が各教員に委ねられていること、美術科における協働的な学びの実践方法や意義についての検討が十分でないことなどの問題点を挙げた。こうした課題意識を基に、本稿では中学校美術科で実施した実践を報告すると共に、学校外の他者との協働の具体的方法や、協働による学習効果について、その成果と課題を考察する。

４．実践の経緯

静岡大学教育学部美術教育専修の学生有志と教員は、2021 年度から継続して、静岡県内の就労継続支援 B 型事業所や特別支援学校の卒業生のアートクラブとの協働による作品展の実施に取り組んでいる。2021 年度から 2023 年度の３年間で、９つの作品展の企画及び実施に取り組んできた（表１）。

一連のプロジェクトの目的は、「共生社会の形成と実現」を目指して、多様な人々が協働した作品展示機会をつくることである。作品展示の企画や実施過程で人と人との関わりの在り方を検討・創出することなどを目指し、ハード面とソフト面の両面から課題解決を目指すために、繰り返し作品展の企画と実施に取り組んでいる。

本稿で報告する実践は、2022 年度に実施したものである。2022 年度に大学生と大学教員、「atelierQUOKKA」[9]の協働による作品展の実施が決定し、その目的や企画内容を検討している過程で、より多様な人達との協働による作品展の実施を目指して、袋井市立袋井南中学校の中学生（１年生）と美術科教員が作品展へ参加することになった[10]。展示のコンセプトや作品展のタイトル「THE LINE－私と君の形は－」は大学生により提案され、決定した。また、「atelierQUOKKA」との展示は、展示構成や出品作品を変化させながら、静岡市の３か所で計４回実施した（表１の「３」「４」「８」「９」）。袋井市立袋井南中学校は、表１の「４」「８」「９」の作品展に参加することになった。これらの作品展への参加に向けて、題材開発と研究に取り組むことになった。

５．美術科での題材開発

（１）題材の概要

作品展への参加に向け、２つの題材開発に取り組ん

表１　３年間で取り組んできた作品点の企画及び実施

年度	回数	作品展名・期間・開催場所	連携先
2021 年度	1	「アートのある日常 - もうひとつの帰り道 -」 2021 年 10 月 6 日～10 月 25 日、静岡大学附属図書館（静岡本館）4 階ギャラリー	※1
	2	「NEW START LINE - 君を生きているか -」 2021 年 10 月 27 日～11 月 15 日、静岡大学附属図書館（静岡本館）4 階ギャラリー	※1
2022 年度	3	「君がすきな君がすき - 宇宙をかける」 2022 年 10 月 26 日～11 月 16 日、静岡大学附属図書館（静岡本館）4 階ギャラリー	※2
	4	「THE LINE- 私と君の形は -」 2022 年 11 月 19 日～11 月 24 日、青い麦（静岡市葵区）	※2 ※3
	5	「アートをつくる日常 - 遊び場の宇宙 -」 2022 年 11 月 21 日～12 月 8 日、静岡大学附属図書館（静岡本館）4 階ギャラリー	※1
	6	「アートをつくる日常 - 遊び場の宇宙 -」 2023 年 3 月 18 日～3 月 23 日、青い麦（静岡市葵区）	※1
2023 年度	7	「cellect」 2023 年 8 月 4 日～8 月 8 日、青い麦（静岡市葵区）	※1
	8	「THE LINE- 私と君の形は -」 2023 年 8 月 20 日、静岡駅北口地下広場イベントスペース	※2 ※3
	9	「THE LINE- 私と君の形は -」 2023 年 8 月 22 日～8 月 26 日、青い麦（静岡市葵区）	※2 ※3

※１　特定非営利活動法人　ひまわり事業団　就労継続支援 B 型　それいゆ
※２　静岡県立富士特別支援学校富士宮分校の卒業生の ART クラブ「atellierQUOKKA（アトリエクオッカ）
※３　袋井市立袋井南中学校

だ[11]。２つの題材の対象者は同じ生徒（１年生）とし、２つの題材は関連性のある題材として扱った。題材の概要（「題材名」「時期」「目標」「評価規準」「学習計画」）については、表２に示した。

２つの題材の「題材名」は、「THE LINE-私と君の形は-　友達の『その人らしさ』を表そう」（実践１）、「THE LINE-私と君の形は-　オリジナル模様を作ろう」（実践２）とした（以下、実践１、実践２と記す）。題材領域は、絵画・彫刻領域である。

題材の「目標」は協働的な学びにより、中学生が自分の表現のもつ価値に気付いたり､他者の表現の良さ、存在の価値を尊重したりすることに重点を置いた。

実践時は、コロナ禍であったことや三者との物理的な距離があったことから、遠隔でも協働できる方法を模索した。さらに、協働的な学びに加え、美術科で育成したい資質・能力として作品展のタイトルにもある「線｣の表現に注目するという造形的な視点を設けた。

（２）「協働的な学び」について

前述の通り、「協働」は多様な人達が同じ目的に向かい、複数の者が対等な立場で協力し、働くことを意味していることを踏まえ、美術科の題材では協働的な学びを「あらゆる他者の価値を認めること、互いに尊重し合いながら新たな価値を創り出すこと｣と捉えた。

中学生同士の協働の場面では、友達の「その人らしさ」を表現する活動を通して対話したり、お互いの性格や個性を認め合ったりすること、友達との交流を通して自分なりのものの見方や考え方、価値観やその良さに気付くことを目指した。

中学生と大学生との協働の場面では、大学生が中学生にビデオメッセージで展覧会のコンセプトを伝えることで表現意欲を高めること、中学生の作品を用いて大学生が展示を企画し実施することにより中学生の作品に新たな価値を生み出すこと、展示の様子や来場者の声を受けて中学生が自分たちの作品に新たな価値を発見することを目指した。

中学生と「atelierQUOKKA」との協働の場面では、「atelierQUOKKA」の赤池僚也氏の作品を鑑賞し、感じたことを中学生が表現して新たな作品を創り出すことを目指した。

学校外の他者との協働の場面はいずれも、対面での活動ではなく、間接的な方法で実施している。互いの作品から表現されたものを感じ取り、それを新たな作品として表現することで互いに価値を創り出していくという協働の方法は、美術科特有のものであるといえる。

（３）実践内容

１）実践１について

①題材名

「THE LINE-私と君の形は-友達の『その人らしさ』を表そう」

②対象

中学１年生（146 名）

③目標

友達の性格や個性に注目し、赤池氏の作品から感じたことを基に、線や塗りの効果を考えて工夫し、互いを尊重し合いながら､友達の｢その人らしさ｣を表す。

④評価規準

【知識・技能】

線の形が感情にもたらす効果を理解し、意図に応じて工夫して表している。

【思考・判断・表現】

友達との関わりから感じ取ったその人らしさを基に、表現する構想を練っている。

【主体的に学習に取り組む態度】

友達と積極的に交流しながら創造活動の喜びを味わっている。

⑤学習計画及び実施内容

全３時間で実施し､最初に赤池氏の人物画を鑑賞し、誰が描かれているかを考えさせた。提示する作品は、生徒の興味を引くために、生徒が知っている人物をモデルにしたものを選定した。誰が描かれているかを確認した後、線や塗りの表現に注目させた。それぞれの

表２　題材の概要

題材名	THE LINE- 私と君の形は - 友達の「その人らしさ」を表そう	THE LINE- 私と君の形は - オリジナル模様を作ろう
時期	2022 年 9 月（全 3 時間）	2022 年 10 月（全 12 時間）
目標	・協働的な学びによって自分の表現のもつ価値に気づいたり、他者の表現の良さや存在の価値を尊重したりする。 ・線の形が感情にもたらす効果や構成の美しさを理解して、表現の構想を練り、意図に応じて工夫しながら表す。	
評価規準	知識・技能： 線の形が感情にもたらす効果を理解し、意図に応じて工夫して表している。 思考・判断・表現： 友達との関わりから感じ取ったその人らしさを基に、表現する構想を練っている。 主体的に学習に取り組む態度： 友達と積極的に交流しながら創造活動の喜びを味わっている。	知識・技能： 線の形の性質や構成の美しさを理解し、意図に応じて工夫して表している。 思考・判断・表現： 赤池氏の作品から感じ取った線や形の特徴や面白さを基に主題を生み出し、創造的な構成を工夫し、表現する構想を練っている。 主体的に学習に取り組む態度： 作品を再構成して表現することの面白さを味わい、友達と交流する中で自分の作品の良さに気付いている。
学習計画	①｢atelierQUOKKA｣赤池僚也氏の作品鑑賞 ②線に注目して、友達と互いを描き合う ③大学生からのビデオメッセージ鑑賞、展示について知る	①抽象表現のワークシート１に取り組む ②赤池氏の作品から、面白いと思う線や形を切り取る ③ワークシート２を用いて、線の構成要素を分解する ④線や形を再構成する ⑤消しゴムはんこを彫る ⑥判を押して連続模様を作る

作品にどのような印象があるかを全体に問いかけ、数人に意見を聞いた後、「丸い線や細い線は優しそうなイメージ」、「太い線や黒い塗りなどは力強さやインパクトを感じさせること」を確認した。また、赤池氏や「atelierQUOKKA」についての紹介を行い、本題材で大学生も加えた三者の協働による表現活動に取り組むことや中学生の作品を加えた三者による展覧会を開催することを伝えた。

次に、赤池氏の表現を踏まえて、友達同士で相手の性格を考え、線や塗りの表現を工夫しながら人物画を制作するという学習課題を提示した。人物を描くことに対しては、多くの生徒が苦手意識を抱えている。そこで、表現への興味関心を高めるために「とがびアートプロジェクト」の実践[12]を参考にし、透明な下敷きを用いた。描く対象を下敷き越しになぞっていくという方法を選択し、何度も描いたり消したりしながら納得のいく作品を描けるように、ホワイトボードマーカーを使用した。生徒たちはペアになって友達に下敷きをかざし、会話しながら、友達のどのような性格や個性を表現するか考えながら描いた（図１）。線や塗りの表現に加えて、ポーズや角度を工夫する生徒も見られた。気に入った仕上がりになったところで、油性ペンを用いて清書を行った。

⑥大学生との交流

大学生と中学生は直接対面することはできなかったが、ビデオメッセージを通して、思いを交流することになった。

中学生は、作品の清書後に、大学生からのビデオメッセージを視聴し、大学生と「atelierQUOKKA」による静岡大学図書館ギャラリーで開催された作品展（表１の「３」）の様子について知ることになった。大学生からは、展覧会のコンセプトや会場の様子、生徒の作品を楽しみにしていることなどが伝えられた。生徒たちは、静岡大学図書館ギャラリーの壁一面に貼られたマスキングテープを用いた装飾や、そこに飾られた絵画作品を見て、展示の工夫によって作品の見え方が変わり、展示自体が大きな一つの作品となることに驚きを感じていた。大学生が展覧会のコンセプトや、生徒の作品を楽しみにしていることを話す様子を見て、中学生は自分たちの作品が大学生の手によって、どのような形で展示されるのか、期待感を高めている様子だった（図２）。

また、展覧会の会場が遠方であったことから、多くの生徒は実際に展覧会を鑑賞できなかったため、大学生らが展覧会の様子を紹介するビデオメッセージを作成し、中学生へ届けてくれた。このビデオメッセージを視聴することで、自分たちの作品がどのように展示されたのかを知ることができた。上下に連結されて天井から吊るされた様子や、作品が重なり合って奥行きを感じさせている様子、ライティングによって作品の影が壁に映っている様子を発見し、美術室で見た時と作品の見え方が全く異なっていることに驚きを感じていた。

⑦「atelierQUOKKA」の作品鑑賞と表現活動の相互関連

１年生は実践１を実施前に、オノマトペの文字デザインと、パステルや絵の具を用いた抽象画の題材に取り組んでいた。参考作品を鑑賞してから制作に入るという手順で実施していたが、参考作品を制作した作者に注目することはなかった。

実践１では、「atelierQUOKKA」について紹介するために、本物作品を実際にお借りして鑑賞したり、制作風景の動画を見せたりした。実際の作品を鑑賞すると、生徒は作品の持つ力を直接感じ、「atelierQUOKKA」の方々をプロのアーティストとして認識しているようだった。

障害の有無に関係なく、生徒は純粋に作品や表現方法の持つ魅力に注目する様子がみられた。

２）実践２について

①題材名

「THE LINE-私と君の形は-オリジナル模様を作ろう」

②対象

中学生１年生（146 名）

図１　実践１の制作の様子と制作した作品

③目標

赤池氏の作品から感じ取ったことを基に、自分の見方や感じ方に気付いて主題を生み出し、線の形の性質や構成の美しさを理解しながら表現方法を工夫して、オリジナルの模様を制作する。

④評価規準

【知識・技能】

線の形の性質や構成の美しさを理解し、意図に応じて工夫して表している。

【思考・判断・表現】

赤池氏の作品から感じ取った線や形の特徴や面白さを基に主題を生み出し、創造的な構成を工夫し、表現する構想を練っている。

【主体的に学習に取り組む態度】

作品を再構成して表現することの面白さを味わい、友達と交流する中で自分の作品の良さに気付いている。

⑤ 学習計画及び実施内容

全 12 時間で実施し、実践１と同様、実践２で制作した作品も大学生の手によって展示されることを生徒に伝えた。

実践２では､赤池氏の作品を生徒がサンプリングし、線や形に注目してオリジナル模様を制作し、消しゴムはんこの形で表す活動を行った。消しゴムはんこは、並べて押すことで連続模様になるように制作し、画用紙に連続模様を表した。

図２ ビデオメッセージを鑑賞している様子

図３ 赤池氏の作品を選んでいる様子

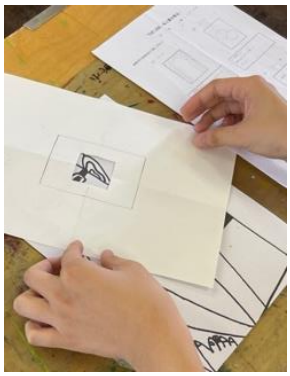

図４ 赤池氏の作品から気に入った線や形を選ぶ様子

実践２は実践１と関連付けながら取り組んだが、より具体的に線の形の工夫とその効果について確認するために、最初にワークシートで、線や形を用いて与えられたテーマのイメージを表現する活動に取り組んだ。以後、「ワークシート１」とし、詳細は後述する。

次に、赤池氏の複数作品の中から、自分が面白いと思った線や形を探す活動を行った。机いっぱいに赤池氏の作品を並べ、生徒が四角い穴の空いたフレームをかざしながら探せるように場の設定を工夫した(図３)。

選択した線や形はフレームをかざした状態で写真を撮影し、ICT 機器で生徒同士が共有できるようにした。生徒はできるだけ多くの線や形を探すことで自分が選ぶものの共通点を探したり、友達が選んだものとの違いを見つけたりした（図４）。

次に、選択した線や形の中からお気に入りのものを一つ決め、その構成要素を分解するワークシートに取り組んだ。以後、「ワークシート２」とし、詳細は後述する。続いて、トレーシングペーパーを用いて版（消しゴムはんこ）の下絵を制作した。まず、赤池氏の作品から選んだ作品とフレームを重ねて置き（図５）、上からトレーシングペーパーを重ねて作品をトレースし、その周りに版の大きさの枠を書いた。

次に、トレースした部分の周りに、ワークシート２を参考にしながら、自分が好きな線や形や塗り方を自由に構成し、続きの模様を描いていくようにした（図６）。模様が完成後（図７）、下絵を切り取り、四分

図５ 赤池氏の作品部分を選んだ様子（下絵）

図６ 赤池氏の作品部分から自分の模様を描いている様子（下絵）

図７ 完成模様(下絵)

図８ 分割して入れ替えた版（下絵）

図９　茶色と赤色を規則正しく色付けした作品

図 10　１つの版を２色で押し、一段ずつ色を変えた作品

図 11 交互に色を変え、２段のまとまりで色に変化をつけた作品

図 12 全体を紺色と水色のボーダーで表現した作品

図 13　寒色と暖色をバランスよく取り入れた作品

図 14　全体で見た時に月明かりに見えるように着色した作品

割して対角線で入れ替えさせた（図８）。図８の手順によって、版を繰り返し刷った際に、無限につながる模様となるようにした。完成した下絵は消しゴムに転写し、彫刻刀で彫り進めた。細かい模様もはっきり表現できるように、切出し刀の使い方に注意させた。

彫り終わった生徒から、制作した版を紙に試し押しさせた。インクは、赤、ピンク、紺、水色、薄青、黄色、オレンジ、黄緑、茶色の９色を準備していたが、試し押しをしているうちにグラデーションにしたり混色したりする生徒が現れたため、単色で使用するインク台と混色用のインク台を分けて使用させた。色を選択する際に、生徒同士で「この模様は波に見える」「この模様には青系の色が合いそう」などの会話が生まれ、お互いの作品に自然と価値付けを行う様子が見られた。

色を選択した生徒は、展示用の画用紙に版を押して連続模様を制作した。この時も、最初から最後まで同じ色で押し続けたり、途中で色を変化させたりと、生徒が表現方法を自分で選び、制作できるようにした（図９～14）。

題材の最後に、実践１の作品展の様子を大学生が説明したビデオメッセージを紹介した。また、展覧会に来場して作品鑑賞した人のコメントも紹介し、生徒たちにも実践１、実践２を通しての感想を記述させた。

⑥作品鑑賞と表現活動の相互関連

実践１では赤池氏の作品を鑑賞して、同様に人物画の制作に取り組んだ。一方、実践２では赤池氏の人物画から鑑賞した後に、赤池氏の作品の線や形を基に、生徒たちが新たな模様を表現する活動を行った。生徒たちにとって、実践１以前の鑑賞と表現の関係は、鑑賞した作品と同様の表現方法を用いて制作する題材が多かったが、今回は初めて、鑑賞した作品とは異なる表現方法を用いた作品制作に取り組んだ。表現が、また別の表現につながり、新たな価値を創造するという関わり方が、生徒にとって初めて実感を伴った経験となる機会であった。

⑦アイデア生成のためのワークシート開発及び検討

本実践では、生徒のアイデア生成のために、ワークシートを２種類開発した。以下、それぞれについて説明を加える。

ｉ）ワークシート１

ワークシート１（図 15）では、生徒が線の形の効果について理解できることを目的として、一問一答の形式にした。具体的には、擬音や具体物をテーマ[13]にして、枠の中に線を使ってテーマを表現させた。また、線の造形的な特徴と見る人に与える印象の関わりについて自覚できるようにするために、「ここがポイント！」の欄を設け、自分の表現の造形的な特徴を記述させた。

ⅱ）ワークシート２

ワークシート２（図 16）では、赤池氏の作品から切り取った線や形を模写し、自分が面白いと思った線や形の構成要素を分解させることを目的にして、アイデアスケッチの形式にした。構成要素を分解するというスモールステップを踏むことで、オリジナルの模様を構成する際に取り組みやすくすることをねらいとし

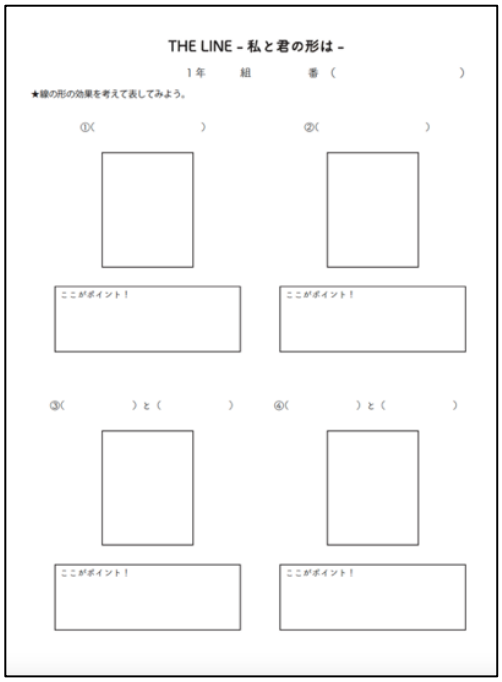

図 15　ワークシート１

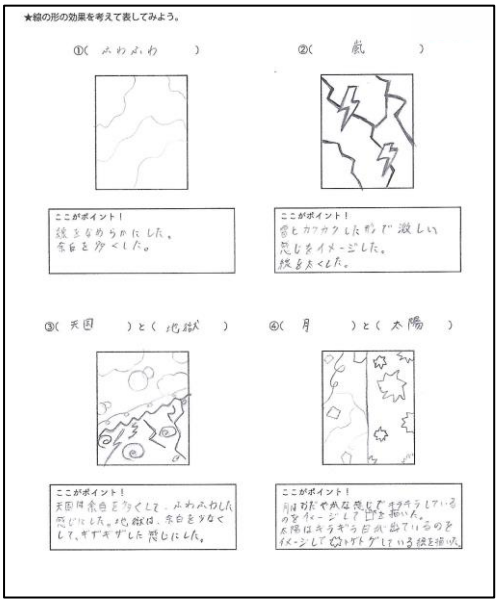

図 17　ワークシート１の生徒記入例

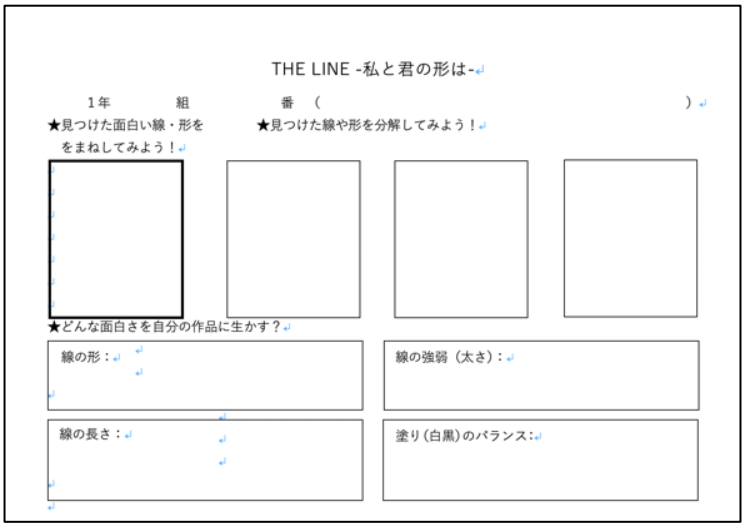

図 16　ワークシート２

図 18　ワークシート２の生徒記入例

ている。さらに、「線の形」「線の強弱（太さ）」「線の長さ」「塗り（白黒）のバランス」の４項目に分けて記述させる枠をつくり、自分が好きな線や形にはどのような特徴があるのかを観察させた。細かく視点を示して観察させることにより、再構成して作品制作する際にどのような線や形を用いたら良いか、考えやすくすることをねらいとした。

iii）ワークシートの成果と課題

ワークシート１は、さまざまな線の形や塗りと余白の工夫とその効果について具体的に考える手立てとなった。ある生徒は、「ふわふわ」というテーマに対し、丸みを帯びた細い線を数本描いた。それに対し「線をなめらかにした。余白を多くした」とコメントしている（図 17）。抽象表現と聞くと難しい印象を持つ生徒が多いが、小さな枠の中に表現するというシンプルさや、その表現の意図を言語化することが、生徒にとって抽象表現を理解する助けになっていた。

また、線の形、強弱（太さ）、余白といった具体的な視点を示したことで、生徒がテーマに合わせてそれぞれの要素を選びながら表現することができ、抽象表現への抵抗感を減らすことができた。生徒同士がワークシートを見せ合うことで、同じテーマを表現したものを比較し、共通点や相違点を見つけながら抽象表現の解釈の幅広さに気付くこともできた。

一方、抽象表現とイラストの区別がつかない生徒がいたことが課題であった。例えば「月と太陽」といった具体物をテーマにした際、月と太陽を簡単なイラストで表現する生徒が数名みられた。具体的な形では描かないという条件をあらかじめ示していても、シンプルな線で描かれたイラストを抽象表現と混同してしまうことがあった。抽象とはどのような表現かを分かり

やすく丁寧に説明することや、テーマ設定の工夫などが改善点として挙げられる。

ワークシート２は、鑑賞で選んだ赤池氏の線や形を用いて、新たな模様を再構成するための要素を整理するのに有効だった。新たな模様を描く時に手が止まってしまった生徒も、ワークシートを見返すことによって描き始めることができていた。

また、模写から描き始める形式になっていたことが、ワークシートへの取り組みやすさにつながっていた。模写した形を構成する要素の中から特に気になる線や形を分解して表すという流れも、多くの生徒にとって感覚的に取り組めるものとなっていた。

分解した線や形の面白さを作品にどう生かすかについて、ある生徒は「かくかくした線、なめらかな線、くねくねした線も少し使う」「細い線と太い線を重ねて使う。最初は中心にスタートしてだんだん広がらせる」「線を長くして永久に続いているようにする」「黒い線を多く使い、塗りを強調させる」とワークシートに記述している（図 18）。基になる線や形を分解したものを観察しながら再構成するというスモールステップが、生徒のアイデアをより具体化させ、スムーズに制作へと進む助けとなった。

ただし、造形的な要素について詳細に言語化できる生徒ばかりではなく、中には「丸い線」「少し細い」「短い」「黒が多い」などの短い言葉でしか表現できない生徒もいた。言語化できない生徒が必ずしも発想できていないわけではないが、造形的な要素を具体的に捉える力を身に付けるためにも、ワークシートを見せ合うなどして、学び合いの時間を設けることが有効な改善策であったと考えられる。

６．展覧会への参加

（１）展覧会の概要

１）実施時期

①2022 年 11 月 19 日（土）～11 月 24 日（木）

②2023 年８月 20 日（日）

③2023 年８月 22（火）～８月 26 日（土）

２）場所

①及び③：貸しギャラリー　青い麦（静岡市）

②：静岡駅北口地下広場イベントスペース

３）展覧会タイトル

「THE LINE-私と君の形は-」

４）参加内容

作品展の企画（コンセプトなど）と展示構成は大学生と大学教員が提案し、中学校教員や「atelierQUOKKA」のスタッフに共有された。展示のキーワードは「線」とした。展示コンセプトは図 19 に示す。①では、実践１で制作した中学生の作品と「atelierQUOKKA」の赤池氏の作品[14]と大学生が赤池氏の作品を基にワイヤーを用いて制作した作品と合わせて、会場に展示された。

線は、自分と他者を分け隔てることもできるが、つなぐこともできる。こうした様々な線の存在を受け止め、受け入れ、その存在を大切に思えるようになりたいと考えた。作品展やその過程を通して、線の内と外を行き来することにより、線の存在を知り、意味を理解し、既存の線の概念を越え、新しい価値を生み出すことを目指した。

図 19　作品展のコンセプト[15]

図 20　青い麦での展示風景（実践 1 の作品展示）

会場の展示構成では、自分と人との間にある線を認識し、それぞれの線を大切に思える空間にした。三者の作品を天井から吊るして展示することで、中学生や「atelierQUOKKA」の作品は、街の家々の窓を想起させ、そこに描かれた人物や大学生が制作したワイヤー作品からは「人」の存在を感じさせた（図 20）[16]。

展示のコンセプト考案に中学生が関わることは無かったため、制作時点ではコンセプトを意識せず、友達の「その人らしさ」を表現することを目的として制作した。

大学生とは直接交流できなかったが、大学生が制作したビデオメッセージを通して、展示コンセプトや展示への思い、中学生への期待が伝えられた。中学生にとっては、自分たちの作品が外部の人の目に触れることや、作品を使って展示を構成してもらうことは初めての経験だったため、良い作品を作ろうと意欲的になったり、どのように展示されるのか興味を持ったりする反応が見られた。

図 21　静岡駅北口地下広場イベントスペースでの展示風景（実践２の作品展示）

図 22　青い麦での展示風景（実践２の作品展示）

②と③では、実践２で制作した中学生作品と「atelierQUOKKA」の赤池氏の作品と大学生が中学生の作品（実践２）を用いて作品展のコンセプトにあった言葉をデザイン化し、切り抜いて作品化したものを、会場に展示した。

三者の作品は、白い段ボールの側面に貼り付け、積み重ねて展示した。大学生が試行錯誤し、段ボールの箱の組み方を工夫した。こうした工夫の理由は、鑑賞者が主体的に足を動かし、作品に近づくことで、見える風景が変化し、作品の新たな一面に気付いてもらうためである。鑑賞者の関わり方次第で、決められた場所から鑑賞するだけでは気づかない作品の変化や面白さに気付いてもらうことを大切にした。さらに、②と③では段ボールの積み重ね方を変化させた。②では、ある地点からみれば、中学生の作品や大学生の文字作品が一斉に鑑賞できる展示構成とした（図 21）が、③ではどの地点に立っても、三者の作品が一斉に眼に入るように構成した（図 22）。これは、②の展示の際、大学生が鑑賞者と交流中に、アドバイスや意見交換などを通して、課題意識を持って実施したものである。

（２）成果と課題

本稿では、実践１と実践２および実践１の作品を展示した①の作品展（表１の「４」）をメインに成果と課題の振り返りを生徒の授業後の感想文から行う[17]。

１）成果

本実践を通して、さまざまな他者との協働の中で、自他の価値を認め、自分の見方・感じ方に気づき、他者を認める場面を設定することができた。

実践１では、互いの性格や個性に注目して交流することで、つながりを深められたと感じる生徒が多くいた。友達から見た自分の印象について知ることが喜びにつながる様子も見られ、「その人らしさ」に注目することが生徒同士の認め合いのきっかけを作り出していたことが感想から窺えた。

また、生徒同士だけでなく、中学生と「atelierQUOKKA」、中学生と大学生の間にも互いを尊重し合いながら活動に取り組む様子が見られた。今回は中学生が、大学生や「atelierQUOKKA」関係者と直接顔を合わせることは無かった。しかし、作品を介して、表現と鑑賞の一体化による協働の方法に取り組むことによって、年齢差や立場の違いを意識しすぎることなく、それぞれが対等な立場で新たな価値の創造ができた。生徒が他者に自分たちの作品を楽しみにしてもらっているという実感を自身の制作意欲につなげていたことは、尊重されている実感の表れであったと考えられる。また、生徒の感想には、「赤池氏の作品に対するリスペクトの気持ち」「自分たちの作品が展示され新たな価値を創造できた喜び」「大学生が作品を飾ってくれたことへの感謝」「作品を通して交流できたことへの実感」

などが見られたことから、互いを尊重し合えたという生徒の実感が窺える。

実践２についても同様に、展覧会で多くの人に鑑賞してもらえるなら、納得のいく良い作品を作りたいと意欲的に取り組む生徒が見られた。実践１でもらった感想も踏まえて、自分たちの作品が価値あるものであるということを認識し、自信を持って表現に取り組んでいた。

造形的な視点については、線の形や塗りなどの効果を考えて表現することもできた。実践１では性格や個性と線の関わりについて考え、実践２ではさらに具体的に、線の形や塗りの効果について考えながら表現することができていた。特に実践２のオリジナル模様を制作する活動では、完成した模様が「上手かどうか」という基準で判断しにくい作品であったためか、どの生徒も友達と互いに作品を見せ合うことを楽しみ、互いの作品の面白さを認め合うなど、自然と価値付けする姿が見られた。生徒のモチベーションを損なうことなく、純粋に線の形や構成の美しさに注目させる題材として適切であったと考えられる。

２）課題

協働的な学びは、「他者を価値ある存在として尊重する」ことに重きを置いている。今回の実践では、関わりの場面を設定することはできたが、具体的にどのように認め合うかまでは想定していなかった。そのため、実践１では、生徒同士の会話によっては、認め合うことができた生徒もいるし、あまり認め合いに着目できなかった生徒もいた。どの生徒も互いの良さを認められるようにするためには、相手のどのような性格を表現するか明示するなどの工夫が必要であった。

また、「atelierQUOKKA」や大学生との協働の方法についても、中学生の考えを発信するなど、作品以外の関わり方を設定することでより双方向性のある協働による作品展となり、互いを尊重し合う実感が強まったと考えられる。今回は、中学生は展覧会のコンセプトや展示方法の検討には関わらなかった。コンセプトの理解にも難しさを感じたため、コンセプトを理解するところからじっくりと取り組むことで、展示の意義が生徒により伝わりやすかったのではないかと感じた。展示の意義が生徒にきちんと伝わることで、生徒の主体的な態度が育まれ、より自分たちの表現の価値を感じることに繋がったのではないかと考える。

美術科の題材としては、人物画は多くの中学生が苦手意識を感じるものであった。実践１では、表現への興味関心を高めるために下敷きやホワイトボードマーカーを用いる工夫をしたが、それでも「その人らしさを考えながら線で描く」ことに戸惑いを感じる生徒は少なくなかった。今後はどの生徒も積極的に取り組める課題設定の工夫をさらに重ねる必要がある。

図 23　美術室での展示風景（実践１の作品展示）

３）来場者の感想

来場者からは、肯定的な感想を多くいただいた。生徒作品については、「作品の描き方が面白かった」「それぞれの作品の線に個性が表れていた」「作品から生徒の個性が感じられ、実際に会っているような気分になった」という感想が見られた。展示方法については、「光と影の感じが面白い」「吊るされた作品の間を通ることで、作品に入り込みながら鑑賞できた」「優しい雰囲気だった」という感想が見られた。今回の展覧会のコンセプトを来場者が体感できるような展示になっていたことが感想から窺える。

４）生徒の感想

生徒の感想の中で最も多かったものは、友達とのつながりについて言及したものであった。実践１では、互いに「その人らしさ」を探し、描き合うことを通して友達とつながりを深めることができた、楽しく取り組むことができたという感想が見られた。また、友達から見た自分の印象を知ることができたことを喜ぶ感想もあった。

線について言及した感想も見られた。最初は線で個性を表現することに戸惑ったものの、制作に取り組むうちにそれぞれの描き方に個性が表れることを発見し、面白さを感じたという感想が複数あった。日常生活の中でも線や形に興味を持って、面白いものを見つけたいという生徒もいた。

協働に関しては、学校外の多くの方に作品を見てもらえたことに対して嬉しさを感じている生徒が多かった。「普段聞けない感想を聞けた」「作品を見て元気になってくれた人がいて嬉しい」「感想を聞いて自信になった」「頑張ってよかった」「作品を通していろいろな人と繋がっている気がした」といった感想が見られた。他にも、作品によって交流できることを知った生徒や、展示方法の面白さに気づいた生徒、元の作品に自分の想像を加えて全く別の作品ができることに面白さを感じた生徒、協働相手である大学生や「atelierQUOKKA」への感謝を述べる生徒などもいた。

７．おわりに

今回の展覧会の会場が遠方であったため、生徒たちは実際の展示を見ることができなかった。そこで、大学生が中学校を訪れ､美術室に新たに作品を展示した。天井から吊るす展示方法は変えなかったが、場所や光の当たり方などが全く違うため、静岡市での展示とはまた異なった雰囲気の展示となった（図 23）。いつもと違う美術室に足を踏み入れた生徒たちは、自分の作品が実際に展示されている様子に驚きや喜びの反応を見せていた。作品を一つ一つじっくりと見たり、知っている顔を探したり、友達と互いの作品について語り合ったりする様子からは、展示によって生まれた自分たちの作品の新たな価値をしっかりと味わっていることが感じられた。

本実践の協働的な創造活動では、あらゆる他者の価値を認めること、互いに尊重し合いながら新たな価値を創り出すことができた。また、生徒が表現を通してつながる楽しさを感じ、自らの表現の価値に気付き、表現意欲を高める効果もあった。

一方で、三者が協働することの意義や、協働的な学びの価値をより高める協働の方法については、さらなる検討が必要である。

神野（2017）は、美術における協働的な活動を「アート・プロジェクト」とし、良い作品イメージに向かって表現するのではなく、複数の人間が主体的に関わり、プロセスの中で目標を変えることを許容する、アート的なプロセスを経ることが「アート・プロジェクト」にとって重要であるとしている[18]。

美術におけるプロジェクト型の授業では、生徒が主体的に目的を生み出していく創造性を育むことが求められている。今回の三者による協働も、それぞれの参加者が主体的に関わりながら目的を生み出していくことにより、協働的な学びの意義がいっそう大きくなると考えられる。今後は、協働的な学びのプロセスに注目し、さらなる実践を重ねていきたい。

謝辞

静岡大学教育学部美術教育専修の学生の皆様、「atelierQUOKKA」のメンバーやスタッフの皆様には、貴重な機会をいただいたことに感謝申し上げます。

---

[1] 文部科学省 中央教育審議会「令和の日本型学校教育」の構築を目指して ～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）」令和３年１月 26 日、p.19

[2] 同上、p.18

[3] 外務省「SDGs の概要及び達成に向けた日本の取組」令和５年 10 月、p. ２

[4] 現在（2023 年度）、美術科で使用されている教科書を調査対象とした。

[5] 文部科学省『中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説美術編』日本文教出版、p.134、2017

[6] デジタル大辞泉　https://dictionary.goo.ne.jp/jn/（2024 年１月３日閲覧）

[7] 植田蛍（３年生）、岡本晴子（２年生）、神谷椿（２年生）、藤木真理乃（２年生）の４名が学生メンバーとして参加した。なお、学年は、本実践の実施時期のものである。

[8] 本報告は、「国立大学法人静岡大学地域創造教育センター『令和４年度地域連携応援プロジェクト成果報告書』pp. ７-12、2023」、「髙橋智子他『AEL Art Education Laboratory vol. ２』2023、「第 73 次静教組教育研究集会報告書」で報告を行ったものを中学校での題材開発や実践に焦点化して、その成果と課題を再検討したものである。

[9] 静岡県立富士特別支援学校富士宮分校の卒業生と保護者や教員が実施している ART クラブ。毎月一回集まり、絵を描く活動に取り組んでいる。

[10] 作品展への参加については、大学教員から中学校教員へ参加の相談を行い、参加が決定した。

[11] 題材開発及び研究は、中学校美術科の教員と大学教員とで行い､授業を中学校美術科の教員が担当した。

[12] 「モナ・リザでマネ・リザ」という題材の実施方法を参考にした。茂木一司（代表）『とがびアートプロジェクト-中学生が学校を美術館に変えた』東信堂、p.74、2019

[13] 「ふわふわ」「びりびり」「天国と地獄」「月と太陽」などをテーマとした。

[14] 展示会場では、赤池氏の作品だけではなく、ART クラブでの他のメンバーの制作風景の動画を大学生が制作し、上映した。

[15] 国立大学法人静岡大学地域創造教育センター『令和４年度地域連携応援プロジェクト成果報告書』p. ８、2023

[16] 髙橋智子他『2022 年度静岡大学教育学部・地域創造学環美術科研究室報告書 Art Education Laboratory vol. ２』p.11、2023

[17] 実践２の展覧会は、実施時期が 2023 年 8 月であったため、生徒への展示紹介や感想の振り返りなどはまだ授業で取り組んでいない。そのため、本稿の成果と課題の考察は、実践１とその展覧会、実践２に絞って行うこととする。

[18] 神野真吾「アート／美術のプロジェクト―可塑的創造性の学び―」造形 JOURNAL vol.62-１ No.431、開隆堂出版、pp. ３-５、2017